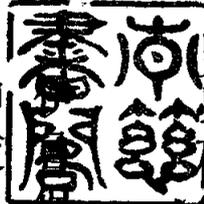


明治四十五年四月

史學
研究會
講演集
第四冊

東京
合資
會社
富山房發行

史學研究會講演集第四冊



目次

保物語考

文學博士 上田

田

敏

一頁

印度史研究資料に就いて

文學博士 松本文三郎 九三

元祿時代の京都小説家

文學士 藤井乙男 一五四

儒佛道三教葛藤史研究資料

文學博士 高瀬武次郎 一九二

鎌倉時代の布教と當時の交通

文學博士 原勝郎 二九九

西魏の四面像に就いて……………

文學士濱田耕作……………二七七

雜錄

因幡國網代の正平古鐘……………湯本文彦……………二九九

本會記事……………三〇五

挿圖

口繪 西魏四面像正面……………對頁

第一圖 同上右側面及左側面……………二七六

第二圖 同上背面……………二七六

第三圖 同上刻銘……………二七六

第四圖 因幡國網代村梵鐘銘文……………三九六

元祿時代の京都小説家

藤井乙男

近世文學の發達變遷の大勢を觀察するに、元祿を中心として慶長より寶曆の頃に至る約百五十年間と、文化文政を中心として明和より慶應の頃まで約百年間との、前後二大期に分ち得べきが如し。而して前期の文學技藝は、之を後期に比較するに全體の調子、概して粗大にして纖巧ならず、元祿模様の派手にしておほまかなると、小紋染の地味にしてこせつきたるとに譬ふべきか。文學に及ぼせる儒教の影響も後期ほど

に著しからず、儒佛の教旨に基きたる教訓的の文學も多く出でたれども、後期の馬琴に因つて代表せらるゝが如き窮屈に切詰めたる物に非ず。又地理上よりいへば前期の文學は其主力上方にあり、契沖や近松や西鶴に匹敵すべきものは一人も江戸になし。之に反して後期は文學の中心全く江戸に移りて、京阪は微々として振はざる有様なり。

元和偃武以來六十年を経て、世は漸く太平の化に浴し、衣食足りて生活の餘裕を生じ、一般世人の知識も趣味も進歩せしかば、學問技能を以て身を立て名を成さんとするもの種々の方面に起り、活氣に満ちたる清新の文學技藝を以て此時代に飾れり。國學の茂睡、契沖、漢學の仁齋、徂徠、俳諧の宗因、芭蕉、院本の近松、小説の西鶴、繪畫の師宣、光琳、歌舞妓の坂田藤十郎、市

川團十郎、淨瑠璃の江戸半太夫、竹本義太夫等、いづれも従來の因襲舊慣を打破して、新に一旗幟を樹てたるものなり。此の如く東西共に有爲の人物を出したれども、要するに上方の方に重みありて江戸は未だ衡を争ふに足らず。さて一口に上方といふ中にも、京阪兩地のいづれにまづ新文藝の起りしかは注目すべき問題なり。

京都は桓武天皇以來の王城にして、戰國以後疲弊せりと雖も、尙文化の中心として學問は公家の手に保持せられ、一般人も輦轂の下にあるを誇とし、田舎侍の寄り集れる江戸や、素町人の幅をきかす大阪などと違ひ、諸事上品にして高尚なる趣味を有すとの自信厚く、京の町人は五位の位といふ諺さへありて、町人すら無位無官の田舎武士や素町人とは各別の品

格ありと自負せり。さらば此の如く歴史的文化あり因襲的趣味ある地に新文藝は起りしか、否々、歴史的文化と因襲的趣味とは常に新文藝の發生を阻害せり。京都人の保守的精神に富み、骨董的趣味多きは、今猶昔の面影を存せり。新しき物は下品なり下作なり、見るに足らずと頭より排斥し去りて、古典舊型に執著し、茶湯香道伊勢源氏古今集ならでは納らぬ所也。殊に國學歌學の如きは昔よりの本場本元、公家の本職、古今傳授の一卷を後生大事に握り詰て、梅雨明の雷が鳴りても放さばこそ、黴の生えた所が無上に尊く、虫の喰つて讀めぬ所に、直打ありと思へり。貴族的保守主義の情弊盛なること此の如き地に、國學や歌學の自由研究の起るべきにあらず。さればこそ二條冷泉兩家の歌學に對する陋習を喝破せし戸田

茂睡は、田舎侍の集合せる江戸に起り、萬葉の新研究は長流契沖に因つて、素町人の都たる大阪に起り、いづれも堂上學風の感化の受けざる人々に因つて唱道せられたり。人或は問うていはん、然らば仁齋の復古學は如何、貞徳の俳諧は如何、皆京都に起りし新文學に非ずやと。曰く漢學の勃興は時機最も早く、嘗て明經博士船橋秀賢が道春の朱子新註を用ひて諸生に講説するを難じ、之が制止を請ひし時、家康は學問は註の新古を問はず、只理のある所に従ふべしと言ひて之を拒絶せり。堂上家の漢學に對する教權は早く既に亡び、中江藤樹山鹿素行の如く程朱以外の學説を唱へ、或は之に疑を挾むものさへ出でし程なるを、是等の後に仁齋が復古學を唱へしとて、契沖の事業とは同一視すべきにあらず。貞徳の俳諧は前に荒木田

守武によりて一旦打破せられし連歌の法式を復興したるものにて、從來の連歌と著しき等差なく、只俗語や漢語を用ひ、掛詞の地口を弄せしに過ぎず、依然たる舊趣味に囚はれし生温き滑稽なればこそ、何の抵抗もなく成立し得たるなれ。談林の新風を唱へし西山宗因は京を去り大阪に行きて革新の旗を翻し、羽翼正に成つて京師の貞門を突き悪戦苦闘の末漸くその本城を陥れたるなり。芭蕉の蕉風も亦江戸において唱説せられたるが、その成功を早めし所以なるべし。

淨璃瑠も最初は京都に起りしも、兎角新奇の事を歓迎せぬ土地柄として、在來の謠曲說經等に壓され、微々として振はず、却て因襲的趣味の壓迫少き江戸において急速に發展し、薩摩淨雲以來種々の流派競ひ起りて、流行を極め、機運大に熟したる

比、淨雲の門人虎屋源太夫上京して、再び京都の淨瑠璃を振興せり。其後宇治加賀掾出でて都人の人氣を得しが、此人の淨瑠璃は謠曲を少しく和げたる弱々しき上品なる節回しにて、その得意とせし語物も葵上、小原御幸、松風、源氏供養など文句も八分方謠曲のまゝなり。加賀掾の曲中近松の作もあれど、大抵謠曲舞曲等を丸取りにし、又はツギハギしたるものにて、只黴臭き古典的臭氣を感ずるのみ。近松が舊趣味の束縛を脱して新機軸を出したるは、元祿十六年京都より大阪に移り、曾根崎心中を書きしを紀元とす。近松や義太夫が大阪に出でて始めて十分にその驥足を伸ぶるを得たるは、地理上經濟上の關係もあれど、京都人が常に舊趣味に執著して新文藝に冷淡なる點與つて力あり。

小説においても亦然り。京都の小説家は古典の引用や、古文學の焼直しをなして、徒らに學問の素養あるを誇る癖あり。これ亦例の伊勢源氏古今ならでは納まらぬ京都の風氣に基くものなるべし。西鶴もし京都に生れて、彼が如き破格の文章と古典の蔑視を恣にしたらんには、果して最初より都人士の好評を得たるべきか、必ずや無學文盲放逸無慚言語道斷の作者なりと罵らるゝこと、恰も談林派が貞門一派より受けしと同様の非難を被りしならん。

元祿以前の京都小説家淺井了意山岡元隣等は通俗的教訓話の作者にして、未だ純粹の小説家といふべからず。小説は實に西鶴によつて新紀元を開かれたるなり。而して是亦京都にいでずして大阪に起れり。さらば京都はどこまでも上

品ぶりにて、西鶴の如き下品なる文學は入れぬかといふに、さに非ず、いつも後れ馳せに人の尻馬に乗りて澄まし顔なり。談林派を散々に罵りたる末、それに降り、淨瑠璃も初めは歓迎せずして、江戸に盛になりし頃、漸く逆輸入をうけしが如く、西鶴の小説の景氣よきにつけて、之を摸倣する者續々相起れり。

西鶴の好色本は天和二年の一代男を初作とし、貞享三年の一代女を打留として、それより筆鋒を武家物、町人物に轉ぜり。然るに京都にて之が摸倣者の出たるは元祿年中にて、烟月堂林鴻の好色産毛は出版年月不明なれども、元祿の初頃なるべく、由之軒政房の好色文傳授は元祿十二年、(或云、初版は元年なり)と同じ人の誰袖の海は同十七年、好色軒圓水の好色大振袖は同十六年の出版なり。

右のうち林鴻は貞門の俳人荻野安靜の門人にて、堀江氏名は重則、別に雲風子と號す、大津の人、後京師に移り、車屋町通竹屋町上ル町に住し、書畫を能くし、俳諧京羽二重、永代記反答、あらむつかし等の俳書の著あり。烟月堂の名は宋の林鴻が泊湧金門の詩句、烟生楊柳一痕月に取れるなり。産毛は例の好色物語の短篇集にて、趣向文章共に西鶴に近く、摸倣としては最も成功せるものなり。由之軒も俳諧師なるべけれど、其傳記未だ明ならず。圓水は増田氏、其雅號より察するに北條團水に私淑せるものか。此人正本屋の芝居評判記に筆を執り、又別に御伽人形の作あり。此二人の作は文體西鶴よりも寧ろ八文字屋風に近似す。是等の人々はいづれも其作少くして多く言ふに足らず、西鶴の祖述者好色本の傳統者として注

目すべきは、八文字屋本の作者江島屋其磧なり。今少しく八文字屋本なるものについて語らんに、こは元來役者評判記より發達せるものなり。役者評判記は遊女の評判記や細見の類に倣ひしものにて、貞享元祿の比より殆ど毎年出版せられ、西鶴團水等も亦之に筆を染めたりといふ。元祿十二年三月始めて八文字屋より役者口三昧線を出版す。京大阪江戸の三卷に分ち、挿畫あり、問答體の批評頗る詳密なり。八文字屋は麩屋町誓願寺下ル町にありて、正本屋九兵衛、鶴屋喜右衛門と相並んで、古くより淨瑠璃本の出版書肆なりしが、口三昧線を出して以來、年々評判記を賣出し、好評を得て始ど獨占の姿となれり。これ其文章挿畫體裁の他に勝りて善美なりしに因る。八文字屋の主人安藤八左衛門、自笑と號し、その出す所

の書は自作の如く装ひしも、實は其磧の作なり。其磧は本名西村市郎右衛門、先祖代々京極通誓願寺前に大佛餅を賣つて家業とせしが、後業を轉じて誓願寺通柳馬場に引移れり。其磧家をつぐに及び遊蕩のため家産を傾く。されど文才ありて能く世態人情に通ぜしかば、自笑これに托して評判記の筆を執らしむ。其磧は又正本屋より頼まれて役者一挺鼓といふ評判記を作りしに、自笑之を憚らず、其關係を絶たしむ。是に於て正本屋は其作を圓水に托せり。かくて其磧は八文字屋專屬の作者とはなれり。

八文字屋本の浮世草子の始は元祿十四年の傾城色三味線にして、こは三都を始め諸國遊女の名寄に、遊女に關する小話を附録したるものにて、全く役者評判記と形式を同じうせり。

かくて漸次出版を重ねるに従ひ、細見評判記の體裁を離れて純然たる小説體を成すに至る。色三味線について傾城曲三味線、傾城傳受紙子、野白内證鏡、傾城禁短氣等を出し好評ありしが、作者と板元との間に利益分配上の争ありしと見え、正徳四年正月に至り、其積は其子の名義を以て、新に書肆を開き、自作の評判記役者目利講を出版しその開口に従來八文字屋より出せる書は皆自己の作なり、我こそ評判記類の本家本元なれと呼號し、其二月八文字屋よりは役者色系圖を出し、之に對する反駁を載せ、爾來六年間互に鎬を削りて相争ひしが、總方共に其不利なるを悟り、終に歩み寄り折れ合ひて、享保四年正月役者金化粧を自笑其積の連名を以て出し相和解せり。されども此後の著作は皆明に其積の名を署し、且八文字屋以外

の書肆菊屋などよりも出版せり。かくて其蹟は元文元年六月、七十歳にて歿しぬ。

八文字屋本の聲價を揚げたるはその傾城物にして、文學史上の位置正に西鶴の一代男と相當るべきものは傾城色三味線なり。此類の書は其外形大抵評判記やうの横本にて、俗に枕本と稱せらる。文章は溫和流暢にして、秩序整然、前後一貫、娓娓として語り、循々として説き、西鶴の氣まぐれにして暗示的なるに似ず、警拔奇峭の妙は彼に劣るも、委曲周到の巧は彼に勝れり。蓋し西鶴の如く雜駁險怪なる文章は溫雅なる京都人の嗜好に適せざるならむ。當代の風俗習慣等の描寫に重きを置かずして、専ら人情を精密に寫すことに力めたる點は、近松に似て西鶴と反せり。西鶴は衣服髮飾などうるさき

まで精しく寫し、人情は略筆にて急所々々を強く太く書くと
いふ流義なり。

其蹟は又西鶴の永代藏、胸算用等の町人物に相當すべき作
あり。善悪身持扇、商人軍配團の類是れなり。是等はいづれ
も一篇毎に獨立の小話集なるが、又時代物、御家騒動、俗解物類
の續物の作あり。百姓盛衰記、西海太平記、當世御伽曾我、義經
風流鑑の如き是なり。俗解物は西澤一風、都の錦等のなせる
如く、古代の事をもすべて現代化し、大磯化粧坂の遊君も島原
新町のそれに等しく、曾我兄弟も義經も皆當時の遊冶郎や大
盡と少しも擇ぶ所なし。こは現代謳歌の風潮の一斑を現せ
るものにして、近松の淨瑠璃も菱川の浮世繪も皆同一揆なり。
御家騒動の結構は淨瑠璃歌舞妓と等しく、若殿の放埒、奸臣の

陰謀、寶物の紛失、忠臣の苦節といふ順序を経て、めでたしく
の大團圓に至るを常とす。而して是等の時代物は淨瑠璃又
は歌舞妓の種を流用したるもの甚だ多し。例へば大内裏大
友眞鳥が竹田出雲の同名の丸本に基き、契情阿國歌舞妓が嵐
三十郎座の女歌舞妓千代始に據れるが如し。要するに八文
字屋本の時代物は小説として價値多きものにあらず。

最後に注意すべきは、其磧が氣質物を始めたることなり。

こは西鶴の永代藏、武道傳來記の如き町人氣質、武家氣質の小
話集より暗示を得たるならむが、さりとてその創規の功を没
すべきにあらず。況や西鶴とはおのづから別様の趣致あり
て、輕妙自在、機智横溢、詼諧の中に教訓を寓し、人情を盡したる
をや。正徳五年の世間子息氣質を初として、世間娘氣質、享保

二年)浮世親仁形氣(同五年)世間手代形氣(同十五年)皆佳作と稱すべし。其殞歿後、明和安永の比に至り永井堂龜友、増谷大梁等盛に氣質物を著し、一時大に流行したれども、いづれも狗尾續貂の誚を辭する能はず。此他寶永の頃に西鳳(御前獨狂言)―寶永二年刊)西樂世の是沙汰―寶永三年刊)などいふ京の作者あり、いづれも西鶴に私淑せし名稱と見ゆ。

西鶴の町人物武家物の摸倣者は尙二人あり、北條團水と月尋堂と是なり。團水又團粹、滑稽堂、白眼居士等の號あり。兩替町通二條上ル町に住み、晩年東洞院に移る。西鶴が俳諧の門人にして、師の歿後浪花に赴き、その草庵を守ること七年にして京に歸り、寶永八年正月四日四十九歳にて歿す。一生涯清貧の人なりしといふ。

俳諧家譜、講家大系
圖、俳諧家譜、京羽二重

著はすところ俳書に團袋、特牛、彌之助、秋津島、塗笠等あり。戯作に新武道傳來記、晝夜用心記、一夜船、新永代藏等あり。新武道傳來記と新永代藏とは西鶴の武道傳來記と永代藏とに據れること言ふまでもなし。晝夜用心記(寶永四年刊)は詐譎ヘテンの話三十六種を取合せたるものにて、多くは當時の實説なるべく、支那の杜騙新書の類なり。卷六なる「子を思へば晝の闇」の一章は、嘗て紅葉山人が茶碗破といふ新講談に仕組みしものにて、殊に面白き話なるが、こは中川喜雲の私可多話(萬治三年序)卷三に出でたる小話を敷衍せしものなり。兎に角用心記と新永代藏とは此人の傑作なるべし。一夜船一名怪談諸國物語は諸國の奇事異聞を集めしものにて、西鶴が諸國はなしの類なり。之を誹家大系圖に團水の名あれども別人

なりと斷じたるは、何に據れるか頗る疑ふべし。又諸國の正月風俗を書き集めたる正月揃といふを、團水の作としたる書あれども、此著者の白眼居士は全く別人にて、貞享四年に好色破邪顯正を著して西鶴を罵りたる東山の僧なるを、後には書肆のさかしらにて團水と入木したる書まである由、柳亭種彦の辯あり。本朝智惠鑑(正徳三年刊)武道張合大鑑の二書、共に團粹の序文あれども、文體正月揃に酷似し、儒佛の引事いたづらに多きに徴すれば、是も東山僧白眼居士の作にあらずやと疑はる。日本小説年表に寶永四年の千尋日本袋(袋は織の誤)を團粹の作としたれど、こは別人の作にて團水は只序文を書きたるまでなり。京攝戲作者考に團水の作として男女色競馬を擧ぐ、その外題より察するに好色本らしけれど、未だ見ざ

れば何とも言ふ能はず。尙西鶴の歿後その遺稿として出版せられし書には、團水の補筆せしも少なからざるが如し。

月尋堂は其傳記明ならず、北京散人、看花齋等の別號あり。寶永六年の今様二十四孝、子孫大黒柱を初として五六種の戯作あり。文章は西鶴を學びたれども、團水よりも一層平明暢達にして、八文字屋風に近づけり。此人の武道眞砂日記は武道傳來記の類にして、世間用心記は團水の晝夜用心記と全く同種のものなり。此二書の刊年は明和九年及び十年となり居れど、こは書肆の新板の如く装はむとて、さかしらに年號を彫替へしものなるべし。何となれば假に二十四孝や大黒柱の出たる寶永六年を作者三十歳の時と見れば、明和九年は九十三歳となり、又明和は九年限りにて十年といふ年なし。思

ふに寶永より享保へかけて榮えし人と見ゆ。

西鶴出で、其摸倣者續出し、小説の作風一變したるも、尙一方には前代の餘風を存して、教訓物怪談物も並び行はれたり。教訓物怪談物の大家淺井了意は長命にして、元祿四年まで生存したれども、こは寛文時代の代表作者と見るべきものなり。此人の作にて有名なるは御伽婢子オキガヒメ寛文六年刊及びその續篇狗張子イヌカサ(元祿五年刊)にして、いづれも諸國の奇事異聞神仙怪異の譚を集めたるものにて、剪燈新話に基きたる作なり。此系統を繼承せるものに、林文會堂、青木鷺水等あり。

文會堂名は義端、通稱九兵衛、儒醫伊藤素安の門人にして書肆を業とす。了意の狗張子を出版したる縁故あるより、おのれも之に倣ひて其後篇ともいふべき玉櫛笥、玉箒木等を著せり。

鷺水は別に、白梅園、三省軒、歌仙堂等の號あり。雜屋立圃の門下にて、御幸町通二條上ル町に住む。誹諧新式、誹諧指南、誹諧良材等五六種の俳書の他に、和漢故事要言といへる諺を集めしものや、鷺水閑談といふ隨筆の著あり。戲作には御伽百物語、近代因果物語、本朝新堪忍記等あり。是等は了意の流を汲みたる作物なるが、別に西鶴の好色本系統の丹前艶男といふ著ある由なれど、未だ寓目せず。元祿太平記の記する所に據れば、當時の名優中村七三郎の事を記したるなりといふ。誹家大系圖に鷺水を評して、弱冠ヨリ才智衆人ニ秀デ殊ニ俗事ノ文詞ニ妙ヲ得テ著ス所ノ冊子井ノ西鶴ニモ劣ラズといへるは甚だ覺束なし。文會堂も鷺水も達意の文といふのみにて才氣に乏し、學問は兎も角小説家としては多く言ふに足

らず。享保十八年三月二十六日歿す、行年七十六。

最後に少しく毛色の變りたる作者を紹介して、此一篇を終らんとす。前に時代物を今様に引直すこと元祿時代の風潮なる由を述べたるが、之と同様の趣旨にて俗譯の一體を立てし者に都の錦あり。即ちその風流神代卷は神代紀の俗譯、風流源氏物語は源氏の桐壺箒木を俗譯したるものなり。俗譯といふも元より忠實なる翻譯にはあらず、原文以外の入れ事もあれば、故らに猥雜なる文句を加へし所もあり。高天原の神々も粹様扱ひにズント開け給ひ、平安朝の貴公子も「當世はやる吉岡に大紋つけて淺黃裏、繻子のかへしの二重帶、鬢付とろりと刷毛長」の浮世大盡、どこまでも元祿化せられたり。風流神代此人の傳記は從

卷の紙尾に元祿徒然草、及び風流源氏の空蟬、夕顔、若紫の卷、續刊の豫告あれど是等は上木されずして止みたるもの如し。

來世に知られず、或は錦文流と異名同人とさへ誤り傳へられしが、明治二十九年六月の早稻田文學に、饗庭篁村氏小説家の人物と題する一篇を掲げ、その中に都の錦が寶永元年霜月十八日獄中より差出し、訴狀を發表せられたり。其文は始に本國常陸宍戸郷宇都宮八田之流右大將頼朝公同腹兄左衛門尉知家二十一世、生國攝州大坂宍戸鋏舟、申三十歳と、自己の身分系圖を記し、次にその來歴を語りて、もと攝播の誤植か州佐用郡の鎮守佐用姫神社の神主を務め、八田上宮内少輔光風といひしが、廿一歳の時、學問修業のため上京して、伊藤仁齋の門に入りて經學を修め、傍北村季吟、烏丸資慶について歌學を學び、和漢の書に眼を曝すこと六年、たまく悪友に誘はれて島原通ひを始め、金につまりて三條繩手にある祖父の所持町屋

敷を詐計を以て密に賣りこかし、爲に親族縁者の勘當をうけ、大に窮困し、翌年二十七歳の春新黒谷門前に引込み小庵を結び、佛法修行に志し、山科大宅寺の月波和尚に參禪し、名を鎮舟と改め、糊口のため假名物語を作り渡世すること二年六ヶ月、その後立身のため同學の紹介狀を得て、元祿十六年四月三日江戸に下り、添書の人を尋ねたるに、火災のため行方知れず、十方に暮れて町々徘徊せる中に、無宿改の役人に捕へられ、同年十月薩州山ヶ野金山に流されしが、同囚の怨をうけ、居るに堪へず、一旦逃亡せしも忽ち捕へられて入牢の身となり、餓鬼道の苦堪へがたければ、寧ろ早く首を刎ねられたし、自分が京都にて都の錦といひし由緒は諸藝太平記といふ書にあり云々。饗庭氏は之に附記して、此の訴狀によりて獄中の苦を免さ

れ、同國鹿籠の金山に徙されたり、此所にては、はや取扱もゆるやかになりけん、寶永五年に播磨杉原三冊を著はず(赤穂義士の事なり)其他著作ありしならんが、いまだ知らず、薩州藩市來辰右衛門といふ人、都の錦の詩歌等持傳へたる中に、寶永七年と記したるあり、首を刎られん事を願ひてより、七年はたしかに生たるなれど、其後の事を書留たるもの山ヶ野鹿籠にもあらずといふ、惜き事かな」といはれたり。

饗庭氏以前に都の錦について記したるものは、中根肅治氏の小説家著述目録(明治廿六年六月刊)に、元祿時代人、或曰錦文流同人、或曰通稱宍戸與一」と記し、双木園主人の戯曲小説通志、明治廿七年八月刊に、宍戸鏡舟、初の名は光風、或は光景に作る、澤風軒、又黄金洞裏山人と號すと記し、次に前述の訴狀とほぼ同様の事を略説し、播磨搦原、道芝乃露の二書をその著述として挙げたれども、宍戸鏡舟の都の錦なる事については、少しも言ふ所なし。

右の訴状の出所については、余の寡聞なる未だ知る所なけれども、之を彼の著作に照合するに著々證跡ありて、ほゞ信を置くに足るものゝ如し。彼は他の小説家と異なりて、頻に手前味噌を並べ、盛に自己吹聴をなす癖あり。その著風流日本莊子は神道儒教の立場より、世態人情を批評して氣餒を吐きしものなるが、篇中の主人公なる友部彌市は幼より學問に達し、聰明無比なりしに、二十歳頃より山谷通ひを始め、父母の勸氣を被り、元祿十三年の秋裕一枚を興へて勘當せられしより、俄道心に頭をまろめ、東海道を流浪して京に上り詫住居する由を記し、博學自慢に當時の學者歌人を引合ひに出し、事々しく和漢の書物を並べ立て「和文にいらざる聖賢の語を澤山に引集め、所々に性理の沙汰」うるさく、どこまでも高慢臭きが中

に、新町の遊女お琴の美色を形容して「松の位の若緑、常盤の色
の名に高き天人の迷子といはるゝ程の器量、矢戸與一が假名
文、菱川の浮世繪も及ばず」と臆面もなくほざいたり。與一は
彼が通稱なるべく、本書の主人公を彌市といふも、之に因みし
名と聞ゆ。

又其著御前お伽婢子卷四に「清白節義の士を抱ゆるに大分
の知行を以て呼ぶと雖も得べからず、古への伊尹、今の伊藤維
禎是なり、忠貞の士を求むるに刑罰を以て脅すとも得ること
能はず、昔の伯夷、當世は矢戸光風が如き是なり」といへる一節
あり。伊尹と仁齋との比較も變なれど、伯夷と矢戸光風に至
つては愈々珍妙なり。又元祿太平記卷六に「此頃京都にて八
田光風、四書授蒙句解二十卷に述べらるゝ由なり、此書板行な

り候はゞ初心の便りといひ、本屋の金箱なるべし」とあり。彼が矢戸又は八田の姓を稱し、光風與一といひしを見るに足れり。風流神代卷、御前お伽婢子等に了休堂の印あり。淺井了意と曾我休自(爲愚痴物語の著者)と二人の名を併せたるにや。戯曲小説通志にいふ所の澤風軒又黄金洞裏山人の號は未だ見當らざれども、想ふに流謫後の稱なるべきか。

光風が嘗て神官たりし事の實際らしきは、風流神代卷に神道の奥義を語りて、「此口傳は銀三枚、中臣卜部同斷なり」など註し、『沖津白波』卷三に播州佐與郡佐與姫の社に鬼面を被りし賊の籠りし記事を掲げて、土地の百姓源右衛門の直話なりといへり。有力なる證據とはいひ難けれど、此土地に縁ありげなり。又大宅寺の月波和尚に參禪したりといへるも事實らし

く御前お伽婢子に載せたる宗的といふ禪僧の記事を見るに、全く素人の筆とは思はれず。

彼が著述は左の如し

御前お伽婢子 六冊

元祿十四年十一月序
同 十五年正月刊

風流神代卷 六冊

元祿十四年十二月序
同 十五年正月刊

風流日本莊子 五冊

元祿十四年作

沖津白波 五冊

元祿十五年五月刊

風流源氏物語 五冊

元祿十六年正月刊

最後のものを除きては皆元祿十五年の出版にて、いづれも十四年中の作なり。されば訴狀に元祿十六年四月に江戸に出でたりといへると能く合へり。只一つ疑ふべきは元祿十四年冬序とある梅菴堂の元祿太平記訴狀中の諸藝太平記は

即ち是なるべしに、都の錦の才學を褒めあげたる末に「惜いかな都の錦、その功いくばくもあらずして、行年二十七を限りに西海の浪の泡と消ゆること、洛中書林の涙ぞかし」とある事なり。訴狀によれば流罪は元祿十六年十月なり。然るに太平記の記事によれば、元祿十四年の事となりて二年の差あり。饗庭氏は太平記の記事を傳聞の誤なりと一言に斷ぜられたり。かくいへばそれまでの事なれど、元祿太平記は種々の點より觀察して、都の錦が自己吹聽の匿名作とおぼしき證據あり、こは既に水谷不倒氏が其著列傳體小説史に唱道せられたる所に、西鶴を貶して都の錦を揚げ、又伊藤仁齋を稱へたる二點より推斷せられたるが、此他にも尙有力なる二三の證據あり。太平記六卷に京の書肆と參宮道者との問答に托して曰く

京歌書の外女の教になるべき文は婦人養草、女訓抄、鏡草、女郎花物語杯にて、やがて嚴島の尼の作られたる嫁入道具と申物出来申候、極めて重寶なる書にて、女の身の上に於て教へ誠をしるし、大和唐土の故事を連ね、萬女のもてる調度めく物漏さず書集め候、此書板行いたし候は、上は几帳の扱髪、下は茶の間の投鳥田に至るまで、一部づゝ買ふて、櫛箱に納め給へかし、此書の作者嚴島の尼の事は、御前於伽婢子にくはしく見え侍り候

而して御前お伽婢子には、此尼の履歴を記し、且、此尼の集置きし娶入道具といへる草子あり、すべて女中の玩草に面白き物なり、十二冊あり、僕之を寫置きたり、やがて板に行ひ世の助にせんことを思ふとあり。お伽婢子は元祿十五年正月の出版、太平記は同じく三月の出版にて、此間中一ヶ月の違あれど、當時の印刷術にては板木に手間取る事ゆゑ、無關係の局外者がお伽婢子を讀みたる後、文作して太平記に書載せて出版する

程の餘裕なし、お伽婢子の著者ならでは出來得べき事ならず。又前に引用せし八田光風が四書授蒙句解二十卷の出板豫告の如きも、著者か書肆かの他には知らぬ事にて、例令知るとも殊更にいふべき事に非ず。尙太平記に

昔より今に至りて見醒せずして面白き物は、御伽婢子、可笑記、意愚智物語なるべし、又近年板行ありしには、宗祇諸國物語、武道傳來、御前御伽、是等は萬代不易の書なり。

とあり。貞享二年の宗祇諸國物語や、同四年の武道傳來記と、二ヶ月前出版の御前お伽を並べ擧げて、近年板行せし萬代不易の書とす。言者の何人なるかは問はずして明かなるにあらずや。此他思想において、用語例において、太平記は都の錦が著書と符節を合すが如き點甚だ少からず。

以上説く所に因つて太平記を都の錦の著書と斷定せんか。

訴狀にいふ如く江戸にて無宿改の役人に捕へられて、元祿十六年薩州へ送られしが事實ならば、みづから「西海の泡と消ゆる」とは豫言出来ぬ筈なり。此の解決甚だ困難にして、訴狀の記事を眞とすれば、太平記を錦の作と認定し難く、太平記を錦の作とすれば、訴狀を疑はざるを得ず。今此矛盾を調和せしめむ爲に、試みに説を立つるに、俳道の野心家獅子庵支考が、門人の名に托して自己の終焉記を作り、暫く身を潜めて天下の形勢を窺ひしが如く、都の錦も亦京に居り難き事情ありて、自ら身を隠す覺悟を定め、平家の都落に擬して、出傍題に西海の泡と消ゆるといひしが、偶然讖をなして薩州に追放せられしより、吾人をしてかく考證に勞せしむるにあらざるか。

彼の學問自慢は到る處に學者や書物の尊をならべ、ほとほ

と人をして却走せしむ。思ふに彼は小説を書く外に、書肆の相談相手となりて、翻刻すべき漢籍の選擇をなし、又は諺解類の俗書を作りて口を糊せしならん。太平記にその出板を豫告せる根源塵滴問答大成なども、彼が筆耕になりしものなるべし。兎に角相應に和漢學の素養あり、文章も流暢平明にして、西鶴の如き破格や俳諧調なく、往々七五調の掛詞多き道行振を交へ、好んで故事を引き、詩歌を用ひ、古典的術學的にして、時としては文中の古語に註釋を施せるなど、明和の建部綾足と似通へる節あり。是等は彼が學問自慢の餘弊なれども、亦通俗趣味の大阪に對する京都の好古趣味を代表せるものといふべし。元祿太平記^{五卷}に京都の書肆が大阪の書肆に向ひ

最前貴様都の錦をおとしめそねみ、西鶴を褒め過ごし、西澤を取上げ給へど、浪

花の作者に小學か大學を讀ませて見たい、字面一通もろくに濟むまい、さらば假名草子を作る程に、源氏か狹衣を取出し沙汰なしに聞て見やれ、義理はさておき讀癖さへ醫者坊なるべし。

といへるは、能く此間の消息を傳ふるものにあらずや。かくて古典通を鼻にかけ、和漢の引事業々しく、眞面目臭つて教訓的の語を吐くかと思へば、時々必要もなき所に淫猥なる文句を陳ぬるなど、全く此時代の風潮を現せり。西鶴は勿論其積ほどの觀察も文才もなければ、兎に角一風變りたる作者なり。錦の風に倣ひし者に隱士梅翁あり。洛陽散人容膝軒とも號す。風流源氏の後を繼ぎて、寶永四年より引續き若草源氏、雛鶴源氏、紅白源氏等、年々源氏の俗解を出せり。之を要するに京都の小説家は舊趣味に囚はれて、自ら新機軸を出して、流行の魁たる能はず。文學史上の大立物となれ

るものなし。就中その銚々たるものを求むれば、元祿以前に於て近世小説の祖たる浅井了意と、元祿時代に於て西鶴に基づいて之を一變せし江島屋其磧と、この二人を推すべしとす。

(明治四十四年二月二十六日講演)